

■雲井龍雄 志士。奥羽列藩同盟のために、檄文を草するなど、薩長の措置に反発し続け、鼻首に処された。

くもいたつお

天保改革終・1844＝ 米沢袋町で、藩士中島総右衛門の次男に生まれる。母は於八百。姉2人、兄1人がいた。

阿部正弘首座1845＝ 1歳： 幼名は猪吉であるが、猪橋、権六、熊藏などと、名乗ったりしている。

負けず嫌いの腕白に育ち、

尊徳報徳論・1851＝ 7歳： 近所の上泉清次郎の家塾で学び、上泉から才能と胆力を認められる。

万次郎帰国・1852＝ 8歳： 上泉が病没したため、山田嬭堂の私塾に移る。

ペリー来航・1853＝ 9歳：

安政大地震・1855＝11歳： 郷学の中心的存在だった曾根俊臣にも師事し、

蕃書調所・・・1857＝13歳： 藩校{興譲館}に入学。

図書館の蔵書殆どを読破し、陽明学に到達。“優秀”に選抜され、藩主から褒章を得たり、少年自治活動の指揮者を務めるなど、俊英ぶりを発揮、

桜田門外変・1860＝16歳：

遣欧使節・・・1861＝17歳： 叔父小島才助の養子となり、小島龍三郎となる。

生麦事件・・・1862＝18歳：

8月18日政変 1863＝19歳： 養父が病没したため、家督を相続し、妻よしを迎え、。

禁門の変・・・1864＝20歳： 普請奉行の職務をこなし、藩命により屋代郷の警備にあたるなどしていたが、

薩摩藩士密航1865＝21歳： 米沢藩の江戸藩邸に出仕、江戸警備の任につくとともに、高名な安井息軒の{三計塾}にも入り、

薩長同盟・・・1866＝22歳： 視野を広め、憂国の思想を培いながら、頭角を現して、執事長(塾頭)になるが、政情の変化でか、藩命があり、帰藩。藩の役に立とうと、上洛を望むも許されないなか、將軍徳川家茂が急死し、慶喜が將軍に就くと、京の政情が不安定になり、治安維持にあっていた藩主世子上杉茂憲と藩兵が帰藩となり、情勢を探るべく派遣された家老千坂太郎佐衛門一行の一員となって上洛。薩長土肥はじめ諸藩士と交流儒者の頼支峰に入門したり、谷干城ら{三計塾}の仲間から情報を得て、藩に復命。大政奉還の日、薩摩藩が敵対していた長州と手を組んだことに憤り、佐幕側諸藩と連携すべく、江戸に下るも、

明治維新・・・1868＝24歳：

*戊辰戦争が始まり、慶喜に置き去りにされた旧幕府軍は敗走。“討薩”をかかげた米沢藩の対応も遅れ、薩長新政府が貢士の制を定めるや、米沢藩の貢士に抜擢され、この頃から、雲井龍雄と名乗る。薩摩藩を許せず、長土肥の各藩の連携による“討薩”を画策。貢士でありながら批判を止めないため、危険人物とみられて命を狙われ、京を脱出し、江戸の寺に潜伏。新政府が奥羽鎮撫の兵力をさしむけたのに憤激し、奥羽越列藩同盟に拠って抗戦するため、米沢に帰る。米沢藩兵はすでに越後で戦っていたため、直ちに越後に赴き、「討薩の檄」を草し、列藩同盟の公式文書として採用され、敵方の将らにも感銘を与えるほどであったが、東北諸藩がつつぎに官軍に降り、会津に戻ったところで、米沢藩の撤退をしり、帰藩したところ、藩は、すでに降伏、衝撃を受けた上、慎を命じられる。

戊辰戦争終・1869＝25歳：

*版籍奉還について意見を求められたりするうち、戊辰戦争も終結。謹慎を解かれ、学校局の助教に命じられるも我慢できず、遊学と称して上京、推薦されて、新政府の集議院寄宿生となるが、薩摩への憎悪心は消えず、すぐに辞職、教寄屋橋の船宿に逗留するうち、敗北した戦友らが集まり、反薩摩の長とされ、武装蜂起の機会を伺うに至る。

初の日刊新聞1870＝26歳：

*東京芝二本榎の上行寺・円真寺を借りて、同志を寄宿させ、朝廷の直属兵となることを願う嘆願書を出す、新政府に怪しまれ、不平士族の政府への帰順を説得する帰順部局点検所と開き直るも、謹慎を命じられ、米沢に議送されたが、藩庁や参議広沢真臣に所信を訴えつづけたため、首謀者で重罪人であると、東京に押送され投獄、獄中から師の安井息軒に、殉国の決意を綴った漢詩二編を贈りしたが、拷問の上、鼻首に処された。首は小塚原に晒され、胴体は大学東校の解剖授業に供された。連座する者50人余という大獄で、拷問は苛酷で、獄死する者も多く、斬首21名、遠流11名と、処罰も徹底的であった。